岩手研修・研究旅行報告書

２０１６年１１月

秋田大学大学院教育学研究科
教職実践専攻（教職大学院）

はじめに

２０１６年４月に秋田大学大学院教育学研究科が改組され、教職大学院（教職実践専攻）が誕生した。教職実践専攻は定員２０名のところ、２２名が入学し、内訳は、現職教員院生が１０名、学部卒院生が１２名でした。旧研究科との違いとしては

〇現職、学卒や、専門とする分野・教科、校種に関わらず、全員が同じ部屋ないし隣接した部屋でともに学ぶ環境ができたこと（これまでは分野・教科別に極少人数ずつに分かれ、交流も限られていた。濃密な指導を可能にする面もあるが、囲い込みやハラスメントになる危険もあった。）
〇共通科目ではほぼ全員、コース必修科目では４名から１３名程度の受講者が確保され、相互の経験や意見の活発な交流が可能となったこと（これまではゼロや１、２名の授業も多いうえに、人数も毎年変動するため、文献講読などになりがちだった）
〇実務家教員が８名（特別教員２名、客員教員２名を含む）配置され、７名の研究者教員、その他の学部の兼担教員が協力して教育にあたることとなったこと（秋田県教委や秋田市教委、公立・附属学校の要職を占めてきた人たちばかりで、教育委員会、総合教育センターとの橋渡し役となっている）
〇これまで指導教員に配分されていた院生指導担当研究費を一括し、教職大学院全体の予算として執行できるようになったこと（院生全員の印刷代、コピー代、バス借り上げ代などに使用することが容易になり、これまでの分野・教科別の違いを平等化することができる。）

などを挙げることができる。

他方、教職実践専攻長である私、佐藤は、2011年８月から３年に及んだ、日本教育学会の特別課題研究「大震災と教育」の研究チームに所属し、当時の教育学会会長藤田英典を研究代表者とする日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）「東日本大震災と教育に関する総合的研究」（2012-2014 年度）に参加した。また、私が研究代表者となって、基盤研究（B）「東日本大震災における教育行政機関・職員の機能と実態に関する研究」（平成 24～26 年度）、「東日本大震災後の教育復興の進展と復興教育プログラムに関する研究」（平成 27～29 年度）に取り組んできた。この５年間、一貫して、福島、宮城、岩手の三県を中心に、被災地や被災された方々の子育て、教育・学習に関わる時々の状況を聞き取り、記録・分析してきている。現在取り組んでいる研究では、防災体制や支援体制のあり方ともに、現在における教育復興の状況や、学校等で行われている復興教育の状況について調査し、全国に発信していく予定である。

今回の岩手研修・研究旅行は、この科研調査の一環でもあった。きっかけとしては、

〇岩手大学の前学部長（2015 年度まで）である新妻二男名誉教授は、2012 年度より私の科研のメンバー（研究分担者）であり、岩手の調査では、聞き取り等の調査のコーディネートをお願いしてきた関係であった。特に、大槌町は 2014 年に伊藤教育長と平野総務部長（現大槌町長）及び大槌小学校の聞き取りの際にも、場を設定していただき、同席・同行していただいた。また、岩手大学の教職大学院と秋田大学の教職大学院は同時発足であったこともあり、日本教育大学協会の会議等で同席した折には、設置に向けた情報交換をさせていただいた。現在の岩手大学教育学部長（教育学研究科長）の遠藤学部長は、ドイツ教育

史の研究者であり、秋田大学の元学部長であった對島達雄名誉教授（ドイツ教育史研究者）との関わりで何度もお会いする機会があるとともに、昨年度まで副学部長であり、新妻先生ともども、教職大学院の開設に向けて様々なご示唆をいただいてきたところであった。

2016 年度となり、教職大学院が立ち上がったわけだが、単に教室内での授業にとどまらない経験を院生にしてほしいと考えていた。第一は、他の教職大学院との交流である。岩手大学（秋田と同じ 2016 年度設置）、宮城教育大学、山形大学（2008 年度設置）には教職大学院がすでに設置されていることから、県境を越えた交流により、県ごとの教員文化、教育状況・課題、教育施策の違いなどを知り、協力、連携のあり方をさぐる機会があってもよいのではないかと考えていた。同じ東北とはいっても、県民性、文化性、教育行政等の違いは大きい。それでも東北として、共通する課題を多く抱えており、協同して取り組むべきところが多々あると思われる。

特に、科研の調査などを通じて、岩手県では、復興教育が県の中心的な施策として取り上げられていることが分かっており、岩手大学の教職大学院との交流が実現すれば、その一端を学ぶことができると期待していたところである。宮城教育大学とは、９月の教員研修センターの学校マネジメント指導者講習への参加を通じた交流が実現したが、現職教員院生４名の参加のみであり、交流としては限定的であった。今後、少なくとも現職教員院生だけでもその多くが交流できるように工夫していく必要があるだろう。東北６県の持ち回りで、毎年宿泊付きの交流会、研究発表会、先進校視察等を行うことが考えられる。

第二に、被災地を実際に訪問し、津波災害の様子、復興の状況、学校の状況を見て、話を聞くことができれば、授業科目で実施している「学校危機管理の現状と課題」や、「ふるさと秋田の教育資源とカリキュラム開発」のフィールドワークともなる。加えて、宿泊、バス移動により、集団行動・活動を行うことで、教職大学院としての一体性を生み出すことにもつながることが期待される。この報告書は、この研修・研究旅行に参加した学部卒院生に執筆してもらった。院生全員には、振り返りシートを書いてもらっているが、それとは別に、学部卒院生には報告書の執筆もお願いした。

本研修研究旅行は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「東日本大震災後の教育復興の進展と復興教育プログラムに関する研究」（平成 27～29 年度）の一環として実施した。

参加者は以下の 21 名

教職大学院１年次

現職教員院生（４名）: 佐藤孝成、木村司、門脇恵、三浦益子

学部卒院生（12 名）: 野坂奨、富樫啓太郎、辻明日香、岸陽弘、菅原美智、岩澤郷子、髙橋渉

教育学研究科２年次

学部卒院生（５名）: 藤原由佳梨、大友宗一郎、保坂由衣、金拓朗、小野木淳

引率教員（２名）: 田仲誠祐、佐藤修司

日程

【事前学習】

９月２６日（月）

１０：３０～１２：００　　『「想定外」を生き抜く力』片田敏孝防災講演ＤＶＤ

１３：００～１４：００　『ぼくたちわたしたちが考える復興　夢をのせてー宮城県石巻市立雄勝小学校　震災２年目の実践』徳水博志監修・指導ＤＶＤ

１４：１０～１５：００　『命と向きあう教室ー被災地の 15 歳、１年の記録』宮城県東松島市立鳴瀬みらい中学校・制野俊弘、ＮＨＫスペシャル 2015.3.29 放送

加えて事前に、山下英三郎・大槌町教育委員会編著『教育を紡ぐー大槌町　震災から新たな学校創造への歩み』明石書店（2014 年）、制野俊弘『命と向きあう教室』ポプラ社（2016 年）を読むように渡した。

【研修研究旅行】

9月２８日（水）

９：３０　秋田大学正門出発

１１：３０～１２：３０　昼食休憩（道の駅雫石あねっこ）

＊車組は各自で出発、昼食。ホテルの駐車場に車を置いてから、岩手大学に時間までに着くように、タクシー等で移動。

１３：３０　岩手大学到着

１４：００～１７：００　岩手大学教職大学院院生との研究交流会

＊会場：総合教育研究棟（教育系）E25 講義室

岩手県の復興教育・秋田県の学力向上の施策について

１７：３０～２０：００　岩手大学教職大学院院生との情報交換会

＊場所：「ゆ家石垣別邸」マイクロバスで移動。終了後は徒歩でホテルへ。

9月２９日（木）

７：４０　盛岡駅西口バスターミナル・バス待機場出発

１１：００～１２：００　山田町立船越小学校訪問

学校説明、施設等の見学

１２：００～１３：００　昼食休憩（道の駅やまだふれあいパーク）

１３：３０～１６：００　大槌町立大槌学園訪問

＊県立大槌高等学校の隣

学校説明、施設等の見学

＊車組は帰秋。

１７：３０頃　大船渡温泉到着（院生１２名と教員１名）

9月３０日（金）

９：００　大船渡温泉出発、陸前高田を視察

１１：３０～１２：３０　昼食休憩（東和ふるさと村）

１５：００　秋田大学正門到着

【事後発表】

１１月１１日（金）

１４：４０～１７：００　秋田大学教職大学院発足記念フォーラム

院生２名による岩手訪問についての報告

『「想定外」を生き抜く力』片田敏孝防災講演ＤＶＤ

片田敏孝氏（以下、片田氏）は、広域首都圏防災研究センターのセンター長を務める、日本の防災教育の第一人者である。今回のビデオは、片田氏が日本で広く名を知られるきっかけになった『釜石の奇跡』が、どのような取り組みによってもたらされた結果なのかを解説したものである。

『釜石の奇跡』とは、片田氏が避難訓練等に従事した釜石市の全児童・生徒約 3,000 人のうち、99%以上の子どもが助かったことを指して使われる言葉である。釜石市には 2010 年時点で 39,578 人が住んでいたが、そのうち 1,000 人超が死亡・行方不明となったことを考えると、片田氏の防災教育が大きな成果を挙げたことが分かる。片田氏が具体的に取り組んだのが、「津波避難の 3 原則」を徹底することである。「津波避難の 3 原則」は、「①想定にとらわれるな」、「②最善を尽くせ」、「③率先避難者たれ」の 3 原則からなる。

まず「①想定にとらわれるな」とは、ハザードマップ（災害予測図）など、行政が主導して想定した災害の規模を鵜呑みするなということである。東日本大震災が発生する以前、釜石市には明治三陸津波を基にしたハザードマップが配布されていたが、東日本大震災の津波は、ハザードマップの浸水予想地域を超えた。そして、津波で亡くなった方の多くは、「ここまで浸水してこないだろう」と避難しなかった、浸水予想地域外の住人であった。学校もまた浸水予想地域外であったが、児童・生徒は、想定を超えた津波が来る可能性まで考えたため、無事に避難できたのである。

次に「②最善を尽くせ」とは、「○○まで避難したから良し。」ということではなく、より安全な場所を目指し続けることの大切さを指している。震災の際、児童・生徒は事前に設定していた一次避難所ではまだ危険だと判断し、より高い二次避難場所へ自主避難をした。後から調べると、一次避難所には 6 メートルの津波が達しており、より安全な場所を目指した行動が、命を救ったことが明らかとなった。

最後に「③率先避難者たれ」とは、自分だけ逃げるのはカッコ悪いという思いを断ち切り、自分が勇気を持って逃げはじめることが皆の命を救うことになるという教えである。グラウンドでサッカーをしていた生徒が「津波が来る、逃げるぞ。」と声をかけ、真っ先に逃げ出したことが、結果的に他の生徒の速やかな避難に繋がったのである。

こうした片田氏の話から感じたのは、釜石市の児童・生徒が助かったのは『奇跡』ではなく、『必然』であったということである。教育において最も重要なことは安全であり、子どもたちの命を守る防災教育について、我々は深い見識と心構えを身に着けなければならない。

【小野木　淳：社会科教育専修２年次】

『ぼくたちわたしたちが考える復興　夢をのせて－宮城県石巻市立雄勝小学校 震災２年目の実践』徳水博志監修・指導ＤＶＤ

これは 2012 年に、宮城県の雄勝小学校 5 年生の 1 年間の取り組みをまとめたビデオである。担任だった徳水博志先生は、全国に先駆けて復興教育を進めた人物である。総合的な学習の時間を使い、雄勝の漁師との交流やカキの養殖体験をしていく中で、地域の人の生き方に触れたり、これからの雄勝に思いを馳せたりしている様子だった。

このビデオで印象的だったことが２つある。1つ目は津波で被害を受けた子どもたちの気持ちが変化していく様子である。子どもたちは震災によっ

てかなりのショックを受けている。そんな中で震災に関連した授業を展開するのはかなり慎重にならなくてはいけないことが考えられる。あまり触れたくない教員もいると考えられるが、そこにふたをすることなく真摯に向き合ったということが重要な点だったのだろう。初めはホタテ漁などに関心を持っていなかった子どもたちも、漁師へのインタビューや各地への訪問を通して、自分たちが住んでいる雄勝に希望を見出しているようだった。震災で漁場が壊滅的な状況になった漁師たちがあきらめずに漁を続けていくという生き方にも触れて、復興への可能性を感じている様子もうかがえた。

2 つ目は漁師の生き方についてである。沿岸に住んでいる者にとって、津波などの自然災害は避けられないことである。そのことを漁師たちはしっかりと分かったうえで、震災による津波で漁場が壊滅したことを悔いるだけでなく、早い段階から前を向いて復興を目指す姿に感銘をうけた。「その地域に住むための作法を身に付ける」という言葉を別の機会に聞いたが、自然の脅威を想定した上で漁師として生きているという姿はまさに地域の作法を身に付けた生き方といえるのではないだろうか。これは子どもたちにもいい影響を与えたと思うが、大人としても参考になる生き方ではないかと考える。その人がその土地でどういう生き方をしているかということから、地域に根づく生き方・作法ということを学んでいく学習の在り方は、郷土愛を育むうえで大事なことだと考える。

こうした実践は、震災の影響を受けた地域だけではなく、地域の将来を考える学習として各地で意義がある。これから秋田で実践をしていくときにどういう生かし方ができるかをもっと深めていきたい。

【金　拓朗：社会科教育専修 2 年次】

『命と向きあう教室－被災地の 15 歳、１年の記録』
宮城県東松島市立鳴瀬みらい中学校・制野俊弘

「命とは何か」――この大きな問いに向かい合ったのは、東松島市立鳴瀬未来中学校の生徒たちだ。2011 年の東日本大震災を経験した３年後、「命とは何か」を考える授業をスタートさせた。授業を担当した制野先生は以前より、このような授業をいずれやっていかなければならないと考えていたという。震災を経験し、その後心に蓋をして日々を過ごしていた生徒たちが、いよいよ震災と向き合っていく。

制野先生は始めに、震災体験についての作文を生徒たちに書かせた。自身の母と姉を震災によって亡くした生徒は、あの時何もできなかったことに後悔しているということを作文に綴っていた。他の生徒たちはその発表を聞き、友達の思いを受け止めていた。授業後、その生徒の周りには友達が集まり、「ここの部分に共感した」などと声をかけている生徒たちの姿が見られた。

またある生徒は、震災で亡くした父と母が夢に出てくると作文に綴っていた。その両親に必死に手を伸ばすも届かなくて、亡くなっていると頭では分かっているのに手を伸ばしてしまう自分自身がすごく嫌だと語っていた。日常でも気丈に振る舞おうとしている生徒だったが、それは他人に頼ってしまうと、頼られた人が困ってしまうから頼りたくないという思いがあるからだという。このような思いを抱えていることを他の生徒たちは知らなかったが、その思いを分かち合いながらも、「頼ってもいいんだよ」と伝えようとしていた。

友達の思いを受け止めながらも、結局はその人自身にはなれないから、どんな言葉も綺麗事にな

ってしまうと感じている生徒もいた。この生徒は両親が離婚しており、自分自身の生きている価値を見失っているようだった。他の生徒たちも、これまでは震災で失った“家族の死”について考えてきたが、徐々にそこから“自分の生”について考えるようになってきていた。自分自身を見つめ直し、本当の自分を知る。そのために「命の授業」で、命と向き合い、自分と向き合い、心の傷と向き合ってきた。そして、「生きる意味」をみんなで探してきたのだった。

「命とは何か」。ある生徒は「強くて、弱くて、美しい輝き」とまとめていた。またある生徒は「簡単にまとめられるものではない」と言っていた。命とは何だろう。その答えは一人ひとり違うはずだ。そして、その答えを見つけ出すために、一生命と向き合い続けるのだろう。

【保坂由衣：社会科教育専修２年次】

岩手大学教職大学院のみなさんとの記念撮影

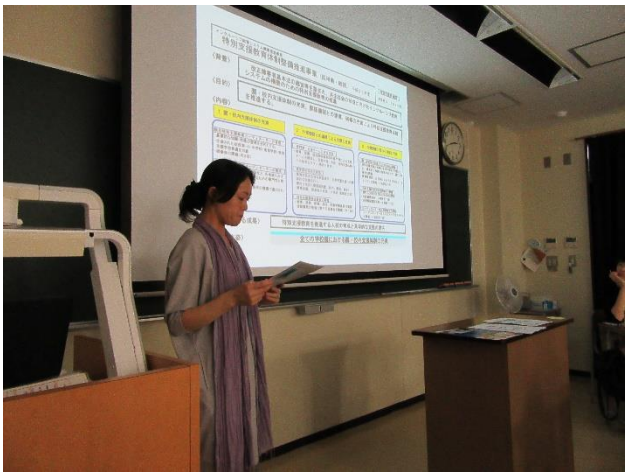
（１列目中心が新妻二男元岩手大学教育学研究科長）

岩手大学教職大学院との交流会：秋田報告

秋田県では、園児・児童・生徒数の減少が教育の大きな問題になっている。特に、幼稚園の数は、平成 17 年度の 105 から、平成 27 年度の時点で半数以下の 47 まで減少している。

また、教育に携わる職員の年齢も、40 代以上の教員が約 9 割を占めており、教員の高年齢化も大きな問題になっている。

秋田県の主な取り組みとして、秋田県の未来を担う子どもたちの「ふるさとを愛し、社会を支える自覚と高い志にあふれる人づくり」を目指す指針として、「秋田わか杉　七つの「はぐくみ」」を設定し、家庭や地域を含めた全県をあげて「教育立県あきた」の実現を目指している。



義務教育課では、「豊かな人間性をはぐくむ学校教育」を目指し、キャリア教育や、少人数学習、学力向上推進事業に力を入れている。キャリア教育実践研究事業では、次世代を担う子どもの育成のために、県政の課題や施策について学び、考える場を設定するほか、校種間の連携を推進し、家庭や地域、企業などが意識の共通化を図り、キャリア教育に取り組んでいく気運が醸成されるよう活動を行っている。また、小学校の国語、算数、理科、中学校の国語、数学、英語の授業での少人数学習の推進を行い、基本的な生活習慣や学力の定着・向上が各学校で図られるように、各学校に人的配置を行い、子どもの個性を生かした子どもの多様性に応える教育活動の展開を進めている。学力向上推進事業では、秋田県の教育の最重要目標である「“「問い」を発する子ども”の育成」に向けた、各学校の取組を支援し、確かな学力の育成の達成を目標として、様々な活動を行っている。

高校教育課の活動では、高校生未来創造支援事業として、体験学習のより一層の充実などを通し、生徒がより良い形で自身のキャリア設計を行っていけるような学習の支援を行っている。特に、インターンシップやボランティア活動に力を入れることで、活動を通した学習意欲の向上や、社会性の育成を図っている。

また、「あきた発！英語コミュニケーション能力育成事業」として、小・中・高の連携により、英語コミュニケーション能力を身に付けた子どもの育成を目標とし、英語コミュニケーション能力育成の拠点校を設置、研修・検討会、English Camp などを実施し、英語コミュニケーション能力日本一を目指し様々な施策を展開している。

秋田県では、現在、学校・家庭・地域の連携を深めていき、そのなかで、知育・徳育・体育の総合的な能力向上を様々な施策の中で図っていることが分かった。

岩手大学教職大学院の院生からの質問では、

「学力の高い生徒層を作っていくにはどうすればよいか、またその児童生徒の学力を伸ばすためにはどのようにすればよいか。」「地域・家庭への学習・生活習慣の確立のための働きかけはどのように行われているのか。」「学校・家庭・地域連携コーディネーターは各学校でどのような方々が中心になっているのか。」といった質問が出された。

【大友宗一郎：英語教育専修２年次】

岩手大学教職大学院との交流会：岩手報告

2016 年 9 月 28 日（水）、岩手大学教職大学院院生との研究交流会が行われた。本稿では、岩手大学院、砂沢剛さんの「教員研修充実のための手立て」と、佐々木康人さんの「いわての復興教育――釜石小学校の事例から――」の報告について取り上げる。

＜報告①「教員研修充実の手立て」砂沢剛さん＞

砂沢さんは、「授業改善について教科の枠を超えて学ぶ教員研修会」について取り上げている。校種、教科を超えた研修会や教科会がさらに活発になればとの思いを抱き、本テーマに取り組まれた。そのために、本年度の盛岡市内の高等学校での研修授業や、その後の協議会の機会を通じ、効果的な協議の在り方や現場の先生方の意識等についての研究を行っている。発表時点では、「組織の中で個人的な関わり合いや意思疎通は薄い傾向にあること」、「教師は研修への意欲はあるが、業務の多忙さにより研修に取り組めない現状があること」、「組織内のマネジメント、連携が不十分な傾向があること」という課題に注目し、その課題の解消のためにどのようにすべきかについて焦点を当てている。

本年度、8 月 1 日に盛岡市立の高等学校で 1 回目の研修授業が行われた。第 1 回研修授業のテーマは、(1) 生徒がモチベーションを高め、主体的に活動する授業づくり　(2) 対話による授業の展開と成立　である。（※2 回目の研修授業が 10 月 21 日に実施する予定とのことである。）8 月に実施されたこの研修授業では、センターに在籍する教諭による師範授業という形態をとっている。対象学年は普通科 1 年生、教科は化学基礎で、「マグネシウムの燃焼」を取り上げていた。その後、協議会ではワークショップ型の協議を行い、高校教諭の方のみならず、中学校教諭・小学校教諭の方々もいらっしゃり、4 人×13 班のグループで活発な協議が行われたとのことである。

＜報告②「いわての復興教育――釜石小学校の事例から――」　佐々木康人さん＞

佐々木さんの報告は、今後の岩手県の復興教育についてである。岩手県における復興教育は、

「郷土を愛し、その復興・発展を支える人材の育成」を目的に推進されてきた。東日本大震災以前、釜石市においては、群馬大学の防災支援事業を通じて防災教育計画を作成したり、指導時間を設けたりする等をして、子どもたちが「自分で自分の命を守ることができるような」、「主体的に考えたり、行動したりできるような」教育に取り組まれてきた。

震災以降、岩手県は全県をあげて復興教育へ取り組んできた。被災から2か月後には全小学校・中学校・高等学校で教育プログラムの作成に取り組み、更に2年後には実施する迅速さであった。「復興教育」という視点に基づき、各学校のカリキュラムをマネジメントしていく取り組みが見られる。「復興教育」には、「いきる」・「かかわる」・「そなえる」という三価値のもと、21の下位項目を設定し、各校、諸価値の目標達成に向けて取り組んでいる。例えば、防災についての学びや、ボランティア活動、道徳、健康・心のサポート、キャリア教育等との関連をはかっているという。

岩手県沿岸と内陸では、復興教育で取り組む内容に違いが見られる。その違いは次のようなものであった。

←岩手大学教職大学院髙橋和夫特命教員

内陸部	沿岸部に比べて、ボランティア活動や、他の地域への働きかけ、道徳教育へ取り組む割合が高いが、自分たちの地域理解等へ取り組む割合は低い。
沿岸部	内陸部に比べて、自分たちの地域理解等へ取り組む割合が高いが、ボランティア活動・他地域への働きかけ・道徳教育への取り組みが低い。

この違いは、東日本大震災における被害の差によるものではないかと考えられるという。内陸部では、これまで「支援をする側」として、沿岸部の学校・人との関わりをした復興教育が中心であるのに対し、沿岸部では、「支援を受ける側」として、自分たちの地域の復興と、今後の防災・減災教育を中心とした復興教育が中心であったとされる。今後は、①それぞれの地域特性に根ざした復興教育を推進すること　②体験活動を一つの教育的価値でつなぐこと　③教育的価値への意識づけを行っていくこと　の3点に注目した教育の方向に向かっていくことだろう。そのための効果的な今後のカリキュラム・マネジメントに注目した研究の報告であった。

「郷土を愛し、その復興・発展を支える人材の育成」というテーマを耳にしたとき、秋田のふるさと教育を彷彿とさせた。ただし、秋田県にはこのように郷土に取り組もうとする本気度や勢いはあるだろうか？　と考えさせられた。私は、秋田にはそうした本気さ、勢いはまだ足りないのではないかと考える。

東日本大震災では、秋田県ではそれほど大きな被害は生じなかった。それは喜ばしいことではあるが、危機感を鈍らせ、「いざ」というときの動きを弱まらせることがありうる。現に、秋田県の災害への備えやその意識は十分とは言えないというデータもあり、今後の教育の浸透や、県民一人ひとりの意識レベルの向上が求められる。そのために、秋田大学大学院に所属する学生は、長期目標を見据えた教育のリーダーとして働きかけてい

くのだという使命感を抱く必要があると考える。

秋田県は被災による被害こそ少ないが、人口流出と出生率の減少等により存続が危ぶまれている県である。方向は異なるが、復興と再生、発展を見込まねばならない地域なのだ。そのために、他者・他機関との対話と協働を通じた取り組みをしていく必要がある。「対話」、「協働」のためには、表面上の付き合いや打算的な関係ではなく、血の通った人同士のインフォーマルな関係が重視であろう。よりよい人間をめざした、自立へのマネジメントが学生一人ひとりに求められていると考える。

【藤原由佳梨：国語教育専修２年次】

岩手大学教職大学院との交流会：懇親会

岩手大学での秋田・岩手各県における教育課題等の報告会終了後は、盛岡市菜園「ゆ家　石垣別邸」にて秋田大学１９名、岩手大学１６名(両大学教員を含む)が参加し、懇親会を行った。地酒や岩手県宮古産の魚介類に舌鼓を打ちながら、両教職大学院の現状や取組、各県における教育課題や取組等について語り合った。

【岩澤郷子：教職実践専攻１年次】

↑　遠藤孝夫岩手大学教育学研究科長

↑　岩手大学教職大学院院生室

船越小学校の教育

船越小学校では木造の校舎で授業が行われている。その理由としては、震災直後は少年の家や体育館で授業を行っていたため、子ども達にストレスのかかることが多かった。それを通して環境の重要性を鑑み、明るさ・元気を与えることができ

↑　佐々木　計　船越小学校校長

↑　井口道子船越小学校教頭

↑　田代修三元船越小学校校務員

るように木造建築の明るい校舎で授業を行うことになった。

教育では「今を生きる子ども達に復興の様子を。」がテーマとなっている。地域や学校の枠を越えて１つの大きな共同体として教育が行われている。そのような大きな共同体を通して、たくさんの人との関わりから、人を育てる教育が震災のあとから実施されている。以下は実際に行われている教育とその内容である。

１．６年生　「復興の様子を学ぼう」

実際の復興の様子を見学して学ぶ。復興を担当している、建設会社の奥村組の協力のもとで授業を行う。その際には模型などの説明も通して、文字や近くの実物を見るのみではなく、俯瞰で復興に向かう地域の景色全体を見ることができるよう手立てが施されている。また、奥村組の１つの科や、全体をまとめる立場にある人からまとめて話を聞くのではなく、様々な科を実際に訪問して、説明を聴いたりインタビューを行ったりしている。

２．６年生　「CM 作り」

上記の復興のものに加えて、電通と連携し、復興の様子を CM にしている。その CM を通

して町全体がより一層前向きに復興に向かうことができるように、行われていると考えられる。

３．３年生　「地域に元気を」

復興に向かう町がより元気になるように、様々なイベントを実施する。ソーラン節の演示、福祉施設やデイサービスの訪問、などがある。これらを通して障がいのある方とも支え合う気持ちを育むことが狙いである。また、お茶の水女子大学の教授を招いての漁業を学び、そこから海の再生についても学ぶ授業も実施した。

４．５年生　「怖い海、しかし恵みを与える海」

テーマの通りで、子ども達は震災を通して、海は恐ろしいものだと学んだ。しかし、そのような一面がありながらも大きな恵みを与えてくれるのも海である。その両側面を学んでいる。怖さの学習として、実演会などを通して津波のメカニズムを学び、津波に備える授業を行っている。またそれも 5 年生のみの学びとせず、学校全体で共有を図っている。恵みの学習としては、近隣の養殖漁業の様子について学んでいる。

これらを通して、子ども達が良い人々との関わりができるようにし、自分自身で考えるたくましさを身に付けることができるような教育を行っている。

海抜の高い場所にありながら、震災を踏まえて避難訓練にも力を入れている。その際には、我々などよりも遥かに「本番を想定して」行われている。笑われても良いし、けがなどをして PTA から怒られることも覚悟して行っている。集団でいる際に生まれる安心感をなくし、「率先避難者たる」ための教育が行われている。

【岸 陽弘：教職実践専攻１年次】

船越小学校の施設設備・子どもたちの様子

岩手県の山田町立船越小学校は海抜約１３メートルの土地にあったが、震災の際に最大１８メートルの津波が校舎を襲い、二階建ての校舎は全壊した。１８９６（明治２９）年の大津波で浦の浜地区の校舎が被災し、校舎は大震災前の場所へ移転した。１９３３（昭和８）年の津波の被害は免れ、町が避難所に指定する場所でもあったが、今回被災してしまった。２０１４年、校舎の裏山を造成して海抜約２４メートルの位置に新校舎を建設し、県内の被災した小中高校で最も早く学校が再開した。校舎からは海や復興作業を行う重機が見える。校舎は整備されたものの、地域全体の復興にはまだ至っていないことが改めて感じさせられた。

再建された校舎は木を基調としたつくりで、温

かい雰囲気があるという印象だった。屋上には太陽光発電のためのパネルがあり、校内に発電量を示すモニターが設置されていた。校舎に入ると学校名が入った大漁旗が飾られており、学校全体での復興に向けた思いが感じられた。廊下を挟み、向かい合って各学年の教室が並んでいるため、児童たちはお互いの様子を見ることができる。日常的にお互いの様子が見れるため、高学年の児童の授業態度や普段の行動が、自然と低学年の児童の手本となると期待されるのではないかと感じた。校内には特別支援学級が３クラス設置されており、必要な支援に応じた教育ができるように準備されていた。

校内の様々な場所に、各学年の取組や学校全体に関わる掲示物が多く、児童の学びの軌跡を見ることができた。玄関をくぐるとまず目に入るのが、「～しよう」という表現で統一された目標である。学校生活を快適に送るために必要な項目を挙げていることに加えて、それぞれの頭文字をつなげると「ふなこし」となるため、児童たちが喜びそうな目標だと感じた。教室と教室の間にある掲示板には、生徒会の執行部が書いたポスターや、各委員会手洗い場の上の連絡、学年ごとの掲示など、限られたスペースをうまく活用しているという印象を受けた。廊下に貼られていた模造紙には「食のふしぎ」というテーマで調査した内容がまとめられていた。課題や予想、検証結果、まとめが分かりやすく示されており、学習の参考になるものだと感じた。児童が興味をもちそうな食べ物の話題であるため、興味をもって見ることで自然と調査内容の上手なまとめ方を学ぶことができるのではないかと感じた。

以上のように、船越小学校は建物のつくりを生かし、児童が授業時間外でも自然と学ぶことができる仕掛けを施した学校であると感じた。

【菅原美智：教職実践専攻１年次】

大槌町立大槌学園の教育

・施設見学

大槌学園が開講してから四日目の学校に訪問させていただいた。校舎の工事は完了していたが，校庭では重機が入って環境整備が未だ行われていた。校舎全体で，柱や様々なところで木が使用されており温かみのある環境であった。昇降口は一階と二階に二つあり，学年により分けられていた。体育館はバスケットボールのコートが２面確保された大きさの大体育館と，剣道や柔道，卓球などが行われているバスケットボールのコート１面分の小体育館があった。大体育館には，雨の日でも外で活動する部活が活動できるようにと一周 110 メートルほどのギャラリーが設けられていた。

小中一貫教育校の図書室は，一部屋で小学生低学年から高学年向けの本や中学生の年代向けの本までが揃っていた。図書室の装飾には地域の方々から頂いた装飾品も棚の上に乗っており華やかであった。

教室環境は各教室にマス目のついた黒板や内線電話，また電子黒板が設置されており，生徒児童が学習に取り組むための環境が整備されていた。移動教室で行われる理科室，技術室，家庭科室も様々な設備が整っていた。理科室には作業等をスクリーンに映し出す装置が設置されていた。秋田の学校では iPad のカメラを利用して代用していたところを見かけたことがあった。家庭科室（調理室）では教卓で教師が実際に行っている手元が児童生徒に見えるようにするための鏡が設置されていた。新築された学校ということで，これまで目にしたことがない工夫された設備を見ることができた。

・大槌町指導主事講話

講話では，大きく「震災からのあゆみ」「小中一貫教育校について」「心のサポート体制について」「ふるさと科について」「コミュニティ・スクールについて」「今後の取り組みについて」の６つの内容のお話をいただいた。

震災からのあゆみでは震災当時，高台に避難しながら津波が町を飲み込んでいく様子を撮影した映像を見た。その後の説明を聞きながら，町が壊滅的な状態にあっても地震から一ヶ月と少しの時間後には学校を再開させていた先生方がいるという視点で震災を見ることができていなかったことに，教師を目指す立場でありながら震災を他人事のように感じてしまっていた自分がいることを痛感させられた。

心のサポート体制やふるさと科は，震災を受けての取り組みが色濃いように感じた。ふるさと科については，復興・防災を基盤とした「生きる力」及び「ふるさと創生」を推進し，地域や自分の生き方を見つめ，大槌町の復興発展を担いうる人材の育成を学校・保護者・地域住民が一体になって連携・協働しながら実現していくものであった。私の地元も沿岸部にあり，山の麓に位置した自然豊かなところである。一方で自然災害は常に視野に入れなければいけない地域である。恵まれた自然がある地域を愛する教育とともに，自然がもたらす災害を予防する防災教育を，今回現地に訪れた時に得た実感をもとに地元に還元したいと思う。

小中一貫教育校について，震災以前からの課題である中１ギャップなどと校舎の被災や生活環境の変化といった震災後の課題が小中一貫教育の導入の背景としてあった。義務教育の９年間を４年生・７年生・９年生時で個々の成長をしっかりと見取りながら、計画的・継続的な学びを推進するシステムが導入されていた。

【富樫啓太郎：教職実践専攻１年次】

大槌学園の施設設備・子どもたちの様子

大槌町立大槌学園は、旧大槌小学校と旧大槌中学校が合併した小中一貫教育を推進する「義務教育学校」である。私たちが訪問した４日前、2016 年 9 月 26 日に児童生徒は新しい校舎で生活を送り始めたばかりだった。スクールバスのターミナルなど、一部まだ完成していない部分もあるが、通常の学校生活を送るには十分だった。普通学級の他にも特別支援学級やことばの教室など、特別支援教育に関わる教室施設を設置されている。

校舎の内装は主に木材で、温かみのある雰囲気が印象的であった。各教室には写真のような木製のプレートが嵌められている。このプレートには大槌町のシンボルである「蓬莱島(ひょっこりひょうたん島のモデ

ルの１つ)」と大槌町のキャラクター「おおちゃん」があしらわれており、この島が子どもたちからも親しまれているのだと分かった。
机や電子黒板の位置は各教室で異なっており、担任教員の意図が組み込まれているのが見て取れた。特別教室棟では、理科室や音楽室、体育館が２つずつ設置されており、小中一貫教育校としてとても広い敷地になっていることが分かる。教室こそ分かれているものの、小学校・中学校を区別するものは一切なく、互いが自由に行き来できるようになっている。

↑　杉田哲朗大槌町教委指導主事

学級教室には各一台電子黒板が置かれており、備え付けの黒板にはマス目が入っていた。備え付けの黒板はレバーで上下に動かせるようになっており、後方に座る児童も黒板が見えるように工夫がなされていた。

子どもたち同様、小学校・中学校の区別なく、全教職員が１つの職員室に集い、打ち合わせや情報交換がしやすくなっていた。こうして教員が自由に交流することで、中１ギャップ等の問題軽減を期待できる。小中連携という教育課題がある中、連携のための企画を設け、時間を空けようと意識しなくとも、大槌学園のように普段の学校生活の中から繋がりができることは有効だと感じた。

↑　大森厚志大槌学園長

↓大槌学園職員室

【辻　明日香：教職実践専攻１年次】

山田町・大槌町の様子

今回初めて、東日本大震災で大きな被害を受けた山田町や大槌町を訪れた。これまでテレビや新聞でしか知らなかった被災地を実際に自分の目で

見て、体感することで命の大切さや防災、復興について改めて考える機会になった。

震災から５年半、山田町や大槌町の復興は確実に進んでいるようである。しかし、まだ更地が多かったり、ダンプカーやトラック、重機などが作業する様子が至る所で見られたりした。また、まだ荒れ地も見られたものの、どの場所も、あのおそろしい津波が襲って来たことが信じられないほど穏やかだった。

両町の所々に「過去の津波浸水区間」という道路看板が設置されていた。上り坂のような所にもその看板が見られた。そこまで津波が襲来したことが信じられなかったし、実際の光景を思い浮かべると恐怖を感じた。看板には、被災地を訪れた人や住民に浸水した区間を伝えるだけではなく、震災を忘れずに後の世代に伝えていこうとする意図もあるのだと推測した。

山田町

山田町に入り、船越小学校に向かう途中で、警察官や日の丸の手旗を持つ住民達の姿が見られた。当日は、天皇皇后両陛下が岩手県を訪問されており、ちょうど山田町や大槌町を訪れることになっていた。天皇皇后両陛下の御一行の到着を待つ住民達の表情は、笑顔で明るく、希望に満ち溢れているようであった。私たちもバイパス道路の辺りで御一行と擦れ違った。

昼食を摂った道の駅の周辺は、被害の様子が感じられなかった。しかし、船越小学校に向かう直前の道路は、地面が舗装されておらず砂利道や砂地だった。海辺の近くには防潮堤のような物が建設の途中で、クレーン車が作業する様子が見られた。また盛り土で整備した丘のような土地が広がっていた。

大槌町

街の中は、がれきは残っておらず、更地が広がっていた。そこにはまだ住宅等が建っておらず寂しさを感じさせる状態であった。津波の被害を受けた旧町役場のような建物が、震災当時のまま残されており、被害の様子を感じることができた。

大槌学園から宿泊地へ向かう途中で、プレハブで作られた商店街が目にとまった。駐車場のようなスペースで、決して大きな敷地ではなかったが、地域の人々や学校から帰った子ども達の姿が多く見られた。地域住民が集う憩いの場になっているようだった。しかし、そこを通り過ぎると、

ほとんど人の姿が見られなかった。

おわりに

今回、二つの町を訪れたが、これで全てを知ったつもりになるのではなく、今後も何ができるのかを考え続けていきたい。そして教師として、児童生徒に防災教育について指導する際に、山田町や大槌町の訪問で学んだことを伝えていきたい。

【髙橋　渉：教職実践専攻１年次】

大船渡市・陸前高田市の状況

大船渡市に実際に行ってみると、海がすぐ近くにあることを実感し、津波がきた際に多大な被害を受けることは容易に想像できた。大船渡温泉の露天風呂から見える広大な海はとても美しかったが、その海が襲ってくることを考えると非常に恐ろしく感じる。大船渡市自体をゆっくり見ることができなかったのは残念であったが、バスでの移動中は常に海が見える状態で、海と共存している町であることがわかった。

陸前高田市を訪れた際、特に印象に残ったことは、トラック等震災関連の車が絶えず行き来している様子である。この様子を見て、まだまだ復興には程遠いと感じる一方で、震災当時に比べるとだいぶ町が整備されたのではないかと感じる面もあった。震災直後の町の様子を実際に見ることができなかったため、比較することが難しいが、当時は瓦礫などが至る所に散在していたのではないかと予想している。5 年経ってから陸前高田市を歩くと道路は人も車もスムーズに移動できることが体感できる。町を歩くという単純なことであるが、甚大な被害を受けた場所がたくさんある中で、歩きやすいように町を整えることは時間がかかるだろう。そのように考えると、復興は着実に進んでいるという見方もできるのではないかと考えた。

陸前高田市では、当時の様子が伺える建物がいくつか残されていた。1 つは道の駅「高田松原」である。建物の中は震災以前の様子が想像できないくらいの状態で、津波の脅威を物語っている。その建物の上部には津波が浸水した位置の目印が書いてあったが、14.5 メートルという高さに驚きを隠せなかった。敷地内には、慰霊碑や復興まちづくり情報館が隣接しており、詳細な当時の様子を理解することができる。2 つ目は、陸前高田ユースホステルである。2 階部分が 1 階部分と同じ高さまで崩れ落ちている様子が衝撃的であった。震災の影響から、海の近くの宿泊施設も少なくなっていくのではないかと考えられる。

更地となっている場所が多々あるなかで、今後どのようにその土地が利用されていくのかとても興味深いところである。大船渡市・陸前高田市どちらも海と共存していかなければならない場所であるが、震災の影響を常に考慮し、意識したまちづくりをすることで復興していく必要があるのではないか。

【野坂　奨：教職実践専攻１年次】

全体終了後の感想

＜現職教員院生＞

〇震災後、自身初めての被災地での時間を体験できたことが大きな事であったと感じている。本来であれば、ボランティア等被災地のために、ということもあるだろうが、今回は岩手大学の皆さんと交流しながら、防災教育、復興教育、実際の復興の様子、学校の営みに触れることができたことは有意義であったし、たくさんのことを考えることができた。できることなら震災のような困難と遭遇しないことが一番なのかもしれないが、困難というフィルターを通して学べること、成長できることもあるかもしれないと考える。貴重な二日間でした。

〇秋田で進められている小中一貫教育だが、大槌町の場合は復興教育と９年間の連続性や、震災被害の子どもたちの心のケアといった課題があると感じた。子どもたちが将来大人になったとき、地域の発展と豊かな自然をいかに守りぬき、そこで生活するため、学校として何をすべきか、その目標に向け県一丸となって取り組んでいることを感じることができた。また危機管理についても命を守るために何をすべきか、管理職としての行動、指示についても体験談をもとに考えさせられるものであった。

〇東日本大震災以降、初めて被災地域を訪れた。復興は思ったより進んでいなかった。震災直後はどんなに大変な思いで過ごしていたのだろうかと思いを巡らせるとともに、５年半が経った現状を住民はどのように感じているのか、考えさせられた。そのような中で、どの町も学校教育に対する期待がとても大きかった。被災地だけでなく、地方の過疎化が進む地域では学校の役割が変化している。コミュニティセンターや情報を発信する場としても重要になってくる。学校の授業では、地域素材や人材を活用して、生徒の能力を伸長させるとともに、地域の活性化のために何ができるかを考え、お互いが高め合えるようにして良い関係が続いていくような計画が求められる。教師の役割も変わってくるだろう。

〇一日目の発表では、内容にやや差があったが、岩手大の先生方から秋田の計画の細やかさについて話をいただき、自分自身も秋田県の教育事情について再考、再認識することができた。教育政策への予算の違いについても話題になったが、教育を支えるための大学機関については岩手県側が整備されていると感じた。教職大学院１年目という同条件の中で交流できたことは、互いの考えを共有したり、同志として意見交換ができたりと有意義だった。被災地訪問は突然の出来事に生活を変えざるを得なかった心中を思うと、いたたまれない気持ちになった。その中でも仲間とともに強く生きようと努めた証が今の町の様子なのだと思った。岩手県内でも内陸と沿岸で意識差があるとのことだったが、私たちは被災者の方々から学ぶ姿勢を忘れずにいることが、この立場でできる最大の手伝いかもしれないと感じた。

＜学部卒院生２年次＞

〇今回の岩手大学との合同の研修を通して、私は私が東北に来て知りたかったことの一つを学ぶことができたように感じた。震災に対してどのよう

に向きあっていくのか、現在の被災地の現状、何が防災において大切なのか、三つのビデオと今回の研修を通して、今まで考えてこなかったこと、気づくことができなかったことを考察し、発見できたように感じた。今回の研修の中で私が今後大切にしていきたいことは、この研修の学んだこと、被災地の方々や岩手大学教職大学院の院生から学び取ったことを、私が教員になったときに次の世代へとしっかりと引き継いでいくことである。３月１１日の震災を教訓として、日本全土で防災に対しての意識が高まり、命を守ることに対して積極的な行動が起こっていくように、又起こしていけるように努力していきたい。

〇今回の岩手研修で強く実感したのは防災教育の必要性である。岩手県では各地で震災以前から防災教育に取り組んでいて、それが震災の際に活かされていたように思う。一方で、秋田県を含め他の地域では果たしてどれくらい防災意識があったのだろうか。震災後には過去のこととして風化されつつあるようにも感じる。このままでは教訓が活かされず歴史が繰り返されてしまうのではないだろうか。そうならないために、学校を中心に、家庭・地域と連携・協力して防災教育を行っていかなければならないと思う。子どもたちに防災意識を正しく身につけさせ、その子どもたちが大人になったときに、社会全体が防災に関して当たり前のように考え行動できるようになっていかなければならないと強く感じた研修だった。

〇今回の研修は震災を私ごととして考える場となり、防災への意識が大きく変わった。２年前まで東海地方に住んでいた私にとって、震災はあくまでテレビの前の出来事で、熊本地震を経てもまだ当事者意識を持てなかったが、自分の身に降りかかる出来事だと認識できた。教員として子どもたちにどんな危険が及びうるのか、事前に十分に確認し、勇気ある行動を取ることができるように心構えをしたい。また、岩手の教職大学院の方々との交流では教育事情について内情を教えていただくことができ、有意義なものとなった。人と人とのつながりは自分が今後どこで教員になっても大切にしていきたい。

〇今回参加するにあたって見たビデオで、「復興教育」という言葉を初めて知った。震災によって大きな被害を受けたにもかかわらず、そこから逆転の発想で、復興を教育に転換しようとしたことに感銘を受けた。また、復興教育を支える核の部分は、被災地だけの取り組みということではなく、どの地域でも取り組まなければいけないことだと思う。自然災害の向きあい方と同時に、地域とともにある教育について考える機会となり大変有意義だった。将来小学校の教員になった際には今回学んだことを生かした活動をぜひ取り入れたい。

〇片田さんは「恐怖や知識は主体的姿勢や危機意識を育まない」と話していた。今回、３日間の研修でその言葉の意味を実感するとともに、「感動や感傷もまたそうだ」と感じた。感動や感傷も一時的なものですぐになくなるからである。院卒学生は今後自分の進む道でそれぞれ教育に携わるが、その中で教育のリーダー的存在として育っていく必要がある。そして、子どもの命と成長を守り促すために、子ども、教育現場、地域の現状を見つめ、検証改善に努め、よりよいものを求める努力を重ねていく必要があるのだと感じた。院生の今後の責任と使命を思った。

＜学部卒院生１年次＞

〇山形大学在学時に被災地から引っ越し山形で暮らす小学生や被災した同級生と関わることが多々あった。しかし、なんとなく現実を知るのが嫌で今まで被災地に行くことがなかった。事前研修会や被災地訪問を通して、目を背けたくなるような話や風景も多くあった。だが、復興に向け着実に進んでいることを

知ることができた。しかし、その一方で心のケアがもっと必要な人々や風評被害等もあり、考えていく必要がある。また、私も秋田と置き換えて様々なリスクを考えて防災教育について学んでいきたいと思う。

〇学部生の頃は被災地を訪れて復興支援のボランティアに取り組んだこともありましたが、５年経って支援の形が変化していると感じました。制野先生のビデオや本で、ある生徒が言っていたように「辛い気持ちは本人にしか分からない。何を言おうと思っても結局きれい事・他人事になってしまう」と私も思います。助けになりたいと思っても、国に出すと薄っぺらな言葉になりそうで、傷ついた子どもたちにどのように関わることが可能なのか考えていました。被災地の学校を見たり、子どもたちに会ったりすすと、意欲的に勉強し、地元のために活動しようとするたくましさが感じられ、子どもたちや地域の未来はまだまだ希望があると感じました。

〇結論から言うと大変濃い時間を過ごすことができた。移動のバスの中でさえ、見える景色に強く心動かされた。一つ一つの形式をもっと長く見ていたいと思った。今まで目を逸らしてきたことだったが、しっかりと目を向けることができた。教育についても知りたいこと、学びたいことが改めてできた。もう一度個人的に訪問してみたい。

〇震災の脅威は被災地の様子を直接見たことで実感した。しかし、大槌学園で見た震災当時のビデオもまた悲惨さが感じられるものであった。津波が押し寄せてくる際のそこにいる人たちの悲鳴が衝撃的で忘れられない。秋田県で防災教育を実践する際にはフィールドワークすることは難しい面がある。そこでビデオを活用し、岩手の実践を参考にしながら防災意識を高めていくことが一つの方法として考えられる。個人的には秋田県の防災意識は高いとは言えないと感じている。避難訓練のあり方等、教育の面から防災意識を高め、災害が起こった際に冷静に判断ができる子どもの育成を目指す。

〇被災地の復興はまだ先が長いと感じた。その一方で確実に復興は進んでいる。訪問先の子どもたちの北条は明るい子が多いように見えた。またバスの中から見えた商店街に集まる人々や立ち寄った先にいた人たちも立ち直ってきていると感じた。岩手県が重視している復興教育や防災教育、「津波てんでんこ」の教訓は被災地にとどまらず、汎化できるものであると感じた。お互いに信じ合うこと、集団心理に惑わされることなく、勇気を持って行動すること、「ふるさと科」の郷土愛、ふるさとに愛情を持って貢献しようとする人を育てること、秋田県の教育にも相通ずる、活かせるものであると感じた。

〇被災地に行くことは今回が初めてというわけではなかったが、見るだけでなく被災した方々から当時の様子を聞き、観光者としては決して入れない学校の中などを見学し、とても充実した良いものとなったと思う。普段の防災教育の大切さを痛感すると同時に、秋田も過去の事例をもっと活かすべきではないかと考えた。男鹿水族館の近くには中部地震のマリア像が立てられている。遠足に来た子どもたちが流されたという話は学校の職員としてとても大きな教訓となる材料のはずだ。「岩手はこうだった。秋田ではどうだろう。」という土地柄に沿った活かし方をするべきではないかと感じた。

〇これまではテレビと画像でしか見ることができなかった被災地を、実際に自分の目で見て歩いて、また当時の様子を体験者から実際にうかがい、東日本大震災がこれまで以上に身近なものになった。私の実家がある山形県の酒田市は海に面しており、山もあり、とても自然が豊かである。その反面、天災が考えられる。今回学んだ防災を地域に持ち帰り還元していきたいと考えている。当事者ではないが、今回得た震災に対する実感のようなものを伝承し、教訓としたい。